

## 第2回高等学校部会について

2016年5月9日に中央教育審議会教育課程部会の高等学校部会が開催された。

10:00から12:00まで文部科学省13階1～3特別会議室で行われた。

一般傍聴者は40名程度であった。

今回の議題は以下の通りである。

- (1) 高等学校の教育課程の改善・充実について
- (2) その他

まず、事務局より資料の説明があった。

前回に引き続き、今回も以下の項目について検討を行なう。特に、本日は1～3を中心に意見交換の予定であるようだ。

1. 高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力について  
(ア) 高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力について  
(イ) 教科・科目等の構成及び単位数について
2. カリキュラム・マネジメントについて
3. アクティブ・ラーニングの視点をいかした学習・指導の改善について
4. 学習評価の在り方について

検討に際し、全ての生徒が身に着けるべき能力を考える「共通性の確保」と個々の多様な可能性を伸ばしていく「多様化への対応」の観点を主な軸とする。さらに「キャリア教育」の視点も重要なものの一つとして挙げられた。

資料2「高等学校・総則の改善のイメージ（たたき台）」では、これまでの議論を踏まえて記載される予定の項目が列挙されていた。まずは「社会に開かれた教育課程」という全体の理念、「資質・能力の三つの柱（知識・技能、思考・判断・表現力、学びに向かう力・人間性）」などの基本的な考え方があり、特に新しくなる部分としては、カリキュラム・マネジメントの実現、アクティブ・ラーニングの三つの視点として「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を目指すこと、観点別の学習評価、キャリア教育の推進などが記載されることになる。さらに、アクティブ・ラーニングの「深い学び」についてわかりやすくするため、その実現に必要な各教科特有の「見方・考え方」を一覧として別紙に記載する予定であるようだ。

資料3・4では、各教科のワーキンググループで検討されたそれぞれの教科目標と見方・考え方が示された。

資料5では、総合的学習の時間と理数探究（仮称）との関係に触れ、理数探究（仮称）の総合的学習の時間との代替の可能性について言及した。

資料6ではカリキュラム・マネジメントの例としてふたば未来学園でのルーブリック形式

の目標を活用した事例を示した。

資料 7 では基礎学力の定着に向けた取組として、現行でも義務教育段階の内容の学び直しが行われている実情を示し、その後押しとして「高等学校基礎学力テスト（仮称）」が検討されていることを示した。

資料 8 では、三つの柱で構成される資質・能力がアクティブ・ラーニングの三つの視点を通じて育成されていくという関係性が図示されている。

10:30 頃から意見交換が行われた。主な意見は以下の通りである。

- ICT の活用に関して、それを促進するためには条件整備が必要であり、情報活用能力という教科横断的な内容を明確にしておくべきである。教材・指導方法などもっと簡易で使いやすいものを提供してほしい。
- 個人の資質・能力の育成には限界があるので、協力し合うことでチームとして成果を得る体験が必要である。議論や対話といっても、目指すものが単独でできることを共有することか、利害調整する合意形成なのかで異なる。
- どのような力を身につけたかが大切であるので、ICT を活用してポートフォリオやキャリアノートなどをつけて振り返り、気づく機会ができることが重要である。
- 地域の課題にもっと取り組んでいくべきである。
- 総合的学習の時間について、現状でも現場ではうまくできていないので、その繰り返しにならないよう誰が何をやるのか位置づけを明確にした方がよい。
- カリキュラム・マネジメントを実現するには、教科間で議論することが必要になる。ルーブリックを用いても段階的にかみ砕いて最終的には子どもにもわかるようにしなければならない。各学校が実現しやすいように方法やイメージを提供してほしい。
- ルーブリックはそれを作るプロセスが大事であることを伝えなくてはならない。できあがった例が一人歩きしてそのまま使われることを危惧する。
- アクティブ・ラーニングが型や作法になって深められなくなることが心配である。教員が教えるのではなく相談員になればよい。
- 学び直しについても際限なくやるわけにはいかないという現実のジレンマがあり、取り残された子どもたちをどうするのかきちんと考えなくてはならない。
- 改訂の意図を伝えるために、わかりやすく記述する工夫の他に国から校長へ、校長から教員へと伝える仕組みを作らなくてはならない。

次回は 6 月 1 日（水）10:00～12:00 に開催予定である。